

子ども会におけるスポーツ活動の現状と課題 —— 特に、球技大会を中心に ——

○仲野隆士・守能信次・江橋慎四郎・木村吉次（中京大学）

子ども会、スポーツ・レクリエーション活動、球技大会

1. 緒言

子ども会は、地域を基盤とする異年齢の会員で構成されている伝統的な子ども集団であり、全国的な連絡組織を持ち、会数及び会員数において我が国で最も大きな児童組織として存在している。その子ども会の主たる活動目的は、文化的、社会的活動のみならず、体育的活動（レクリエーション活動や遊びも含む）などの自主的な活動の集団的な実施をとおして子ども達の連帯を固め、社会の一員としての子どもの成長を地域の父母住民で推進しようとするところにあり、青少年の健全育成や子どもの社会化を促進する場として期待され今日に至っている。

過去に我々が実施した子ども会活動の調査研究において、スポーツ活動は子ども会活動の中心的活動として位置づくと共に、その意義が高く評価されていることが示唆された。それと同時に、スポーツ活動の中でも特に球技大会種目に関心が集中し、ほとんどすべての単位子ども会が球技大会に参加していることを確認することができた。しかしながら、球技大会への関心が高まるに連れて、勝利至上主義が表面化し、それに伴う問題点も生じてきていることが明かとなった。

そこで本研究は、球技大会に焦点を当て、会員である子ども達や過去に子ども会に所属していたジュニアクラブの会員と育成会の役員の球技大会に対するとらえ方の比較や、球技大会に向けての練習等の活動状況をとらえ、その現状や問題点を明らかにすると共に、今後の課題について検討することを主たる目的とする。

2. 方法

本研究の調査対象は、愛知県豊田市の子ども会（①子ども会の会員、②ジュニアクラブの会員、③子ども会育成会役員）であり、「子ども会におけるスポーツ活動に関する基本調査」Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと題するアンケート調査をそれぞれに対し実施した。調査期間は、昭和62年12月20日～昭和63年1月20日の1ヶ月間と統一して実施した。調査内容については、同市の球技大会種目であるソフトボール（男子種目）及びラインサッカー（女子種目）に関する質問項目を設定した。なお、調査の概要は、以下に示すとおりである。

調査対象	配布枚	回収枚	有効回答枚
調査Ⅰ. 子ども会の会員 [各単位子ども会の男女2名]	1720	1395 (81.1)	1327 (95.1)
調査Ⅱ. ジュニアクラブの会員 [各ジュニアクラブの男女1名]	442	384 (86.9)	368 (95.8)
調査Ⅲ. 子ども会育成会役員 [各単位子ども会育成会の代表者]	430	339 (78.8)	330 (97.3)

() = %

3. 結果と考察

まず、表1は、球技大会も含めたスポーツ活動の長所についての各対象群のとらえかたを比較したものである。その結果、3群共に最も高い値を示したのが「みんなでまとまって頑張るところ」であった。このことは、スポーツ活動を通じた連帯意識の高まりが評価されているものと思われる。しかし、「勝つてうれしかったり、負けて悔しかったりするところ」に着目すると、育成会役員は別として、子ども達の間には勝ち負けに関する意識が比較的強く存在していることが確認できる。

表1. 子ども会のスポーツ活動の最も良いと思われる点(%)

対象	長所			
	みんなで 頑張る ところ で あ る	勝負す るこ ろが た た り こ り	学 な で こ ろ の 人 と 異 な い	男 っ で こ ろ が よ い と こ ろ
子ども会会員	37.7	34.8	24.3	3.1
ジュニアクラブ	43.5	35.3	19.5	1.6
育成会役員	58.8	5.8	33.0	2.4

次に、球技大会に向けての練習に着目してみたい。球技大会は、8月中旬から8月の終わりまで実施されているが、それに向けての練習は6月頃に開始され、大会が始まるまで毎週の週末に実施されているのが現状である。そのため、練習や大会期間の影響により、年間活動計

画に組み込まれていたキャンプやハイキング等の活動が、犠牲になることがしばしばあることが前回の調査で明かとなっている。では、そこまでして執着する練習に対し、子ども達はどのようにとらえているのだろうか。

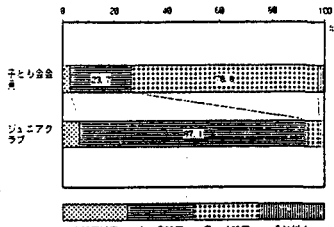


図1. 球技大会に向けての1回の練習時間

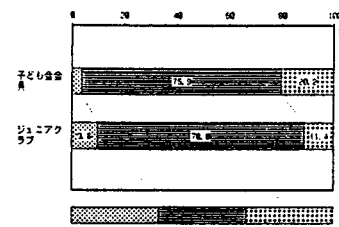


図2. 練習時間に対する意識

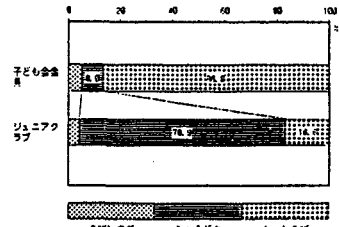


図3. 練習内容に対する意識

図1～図3は、その結果である。まず、図1に見られるように、ジュニアクラブの会員が子ども会に所属していた頃よりも、現在では1回の練習時間がさらに長くなっていることがわかる。そして、図2に示されているように、その練習時間の長さに対して子ども達の大半が「ちょうどよい」と感じている。さらに驚かされたのは、図3において練習の強度は不明であるが、今の子ども達は練習内容に対し圧倒的に「もっと厳しいほうがよい」と思っているということである。このように、球技大会に向けての練習状況の側面を見るならば、練習が開始される6月から、大会が終わる8月の3ヶ月間、子ども会はスポーツ少年団のような集団としての様相を強めるということができよう。

このように見てくると、球技大会に伴う競技志向や勝利至上主義の捉えかたには、育成会役員と子ども達の間には相当程度の差があり、特に子ども会会員の間には競技志向や勝利至上主義が高まっているということがいえる。そこで我々は、このような子どものスポーツ観が球技大会というスポーツ大会の広域化によって強められていくのではないかと考え、子ども会会員に限定して過去に勝ち進んだ大会のレベルごとの分析を試みた。図4はその結果であり、下の大会に進む程、大会の広域化を示している。現実に出場する選手の優先順位は、学年が上の人、まじめに練習する人、うまい人、皆がでるという順になっている。しかし、この図に示されているように、レベルの高い大会へと勝ち進むに連れて、まじめに練習する人や学年が上の人を選手に起用するよりも、技術的に優れている人を選手として起用すべきであるという意見が増加していることが確認された。したがって、子ども達の競技志向や勝利至上主義といったスポーツ観は、大会の広域化を媒介に強められると考えてよいものと思われる。この点に関連して、豊田市子ども会では昭和61年以降、それまで実施していた市主催の球技大会を取り止め、地区の大会までと大会の範域を狭めている。その結果、前回実施した調査（昭和60年度）において球技大会への参加率がソフトボール(95%)、ラインサッカー(92%)であったのが、今回の調査では、ソフトボール(84%)、ラインサッカー(79%)とわずかながら参加率が減少しており、それと同じ時期に展開されているキャンプ、ハイキング、オリエンテーリングといった活動の実施率がやや高くなっているという事実は注目に値するものであろう。

4. まとめ

子ども会における球技大会を中心としたスポーツ活動は、子ども達と育成会役員達の連帯感を深め、さらに子ども会活動の活性化に大いに貢献しており、その点にスポーツ活動の持つ意義と役割が存在していると言えよう。しかしながら、今回の調査でも検証されたように、球技大会の広域化に伴う勝利至上主義の高まりは子ども達のスポーツ観をゆがめる恐れがあるということとを、「監督」や「コーチ」と呼ばれる世話人達は再考し、本来の子ども会の活動目的に準じた、レクリエーション的な価値を志向するところのスポーツ活動の展開を試みる必要がある。

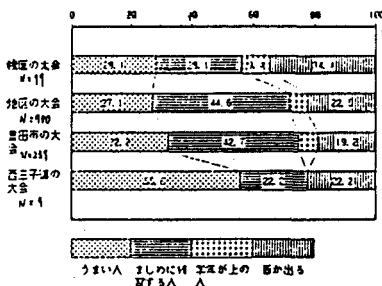


図4. 球技大会に出場すべき選手(子ども会会員)

文 献

- 1)、2) 仲野隆士・他：「子ども会活動における野外活動の位置とその運営に関する調査研究」-豊田市子ども会の事例を中心の一、『第38回日本体育学会大会号』P.95 1987